

夏子の地球の歩き方

第3章 日本・韓国編

久しぶりの日本

大学院卒業後、またフィールドで働きたいという思いもあったが、コスタリカにいる間に起こった東日本大震災が家族の側にいたいという気持ちを強くさせ、日本にしばらくいようと思ひ、帰国後あまり時間を置かずに「アフガニスタン虹の架け橋プロジェクト」という事業に関わる仕事について。これは、アフガニスタンの明日を背負う若手公務員に日本での修士号（特に理系）を取れるように支援する人材育成事業であり、まさに当事者の手によって、自国を良くするという私の考える国際協力の理想的な形だと思った。また、これは若手アフガン人公務員、アフガニスタンの省庁、日本の大学、JICA という様々な組織をつなぐプロジェクトであり、各々の思惑もあり、コーディネートの難しさも思い知ったが、タジキスタンで現地省庁と関わったことがあったし、アフガニスタンの文化的・社会的な側面についてもある程度理解があったことが役に立ったと思う。しかし、アフガニスタンの治安は日に日に悪化してきており、現地に行けないというもどかしさも常について回った。

結婚とキャリア

そんな中、プライベートでの大きな変化があった。大学院時代のクラスメートである韓国人と結婚することになったのである。結婚を決める前から、一緒になるためには、日本で暮らすか、韓国で暮らすか、または第三国か、2人が満足できるようにするためにどうすべきか何度も話し合った。お互い、今後も国際協力でのキャリアを積み重ねたいという気持ちもあったが、二人で家庭を築いて行きたいという気持ちも強かった。

実はタジキスタン勤務時代まで、結婚というものに全く興味を持っておらず、仕事に人生の大きな価値を感じていた。日本に限らず、海外の国際協力分野で働く知り合いは、2～3年ごとに任地が変わっており、身軽な独身の方が大半であり、このまま進むと私も同じような道を行くのだろうと漠然と思っていた。しかし、大使館で共に働く同年代の現地スタッフが子どもを育てながらも（時にシングルマザーでも）国のために、そして家族のために頑張る姿になん

だかとても人生で重要な事を教えられた気がした。また、国際協力という名の下に、他国の人々や家族の役に立つ事を考える時、私も家族を持ち、より共感と深い理解をもって接する事ができたら、より良い仕事ができるのではないかとも思った。そんな思いがあり、少し遠回りになったとしても、自分のプライベートをおろそかにしてはいけな



写真 1：韓国式結婚の儀式

い考え、結婚に踏み切った。また、現実的に考えて私が韓国へ行く方が生活費等の部分でも仕事探しの部分でも有利という結論に至った。だから結婚を機に韓国に行くと言うと、人からは「良く踏み切ったね」とか、「もったいない」という反応も多かった。時には、寿退社とからかわれることもあったが私の中で迷いはなかった。

韓国に住むにあたって、私の一番の目標は、自立できるような仕事を持つ事であった。結婚を機に海外に住んで、現地になじめず孤立している主婦というのは、どこの国に行っても見かけていたからである。韓国での職探しはなかなかの困難を極めた。まず、私の韓国語がまだ初級の段階であったのと、韓国の職場事情が未知な中で仕事ができるのかという不安があった。ところが、幸運なことに日韓で社会福祉事業をしている団体で、これから日韓のみならず国際協力分野へ進出したいという団体に会い、そこでのポストをいただいた。まず、日本と関連があるので、日本語ができることが重宝されることと、また英語での業務も期待されているということで、これは私にとって絶好のチャンスであった。社会福祉という分野についてはまったく初心者ではあったが、勉強できる良い機会と考えるようにした。

韓国の職場と社会福祉という分野

私の新しい職場はもともと孤児院から始まっており、その後、職業訓練、障がい者福祉の分野で韓国の先端を走って来た社会福祉法人である。創立者が日本

の植民地時代でありながら、周りの反対を押し切って日本人女性と結婚し、彼女は夫が亡くなった後も愛情をもって孤児を育てたという話から、今でも日韓友好のシンボルとして語られることの多い団体である。そうした由来から、通常の施設経営の他、日韓の平和事業や、人材交流事業、毎年日韓シンポジウムを行なっている。そして、近年は国際的なネットワークをより強め、孤児や代替養育（alternative care）が必要な児童の権利ための支援に関してのアドボカシー活動を開始しようとしていた。

最初の仕事は、様々な資料の英語翻訳ばかりで、いつになったら国際協力の仕事ができるかと思っていた。私もつたない韓国語しか話せず、私以外は皆社会福祉士であり、英語も日本語も話せない同僚とのコミュニケーションには不自由した。自分の本来できると思っているレベルの仕事と実際の仕事との差に、イライラした時期もあった。でも、今思えば、勤務したての頃は韓国語能力を養い、韓国社会に慣れ、スタッフとのコミュニケーションの訓練という時間になっていたかもしれない。

そうこうしているうちに、やっと自分のいる価値を感じられるようになってきた。最初の国際協力関係の仕事は内戦終結間もないスリランカに出張し、団体として社会福祉分野でどのような協力ができるかの調査であった。私は日本語のできる代表の通訳兼コーディネーターとして随行した。スリランカは初めてであったが、JICA、KOICA（韓国の国際協力機構）、大使館や各関係省庁、NGO等との面会に関わった。ここでも、大使館で働いた経験や、JICA 事業に関わった経験などが役に立った。しかし、国際協力の中で社会福祉分野がまだまだ認知されていないという印象をもった。



例えば、国際協力の中で障害者支援として施設の整備や技術訓練をするシステムを提供したりする。でも、障がい者支援の実際や質について国際協力関係者はあまり分かっていないのではないだろうか。孤児院の支援をする、でもその孤児の殆どは親がいな

写真 2:内戦による児童の精神ケアをする NGO 訪問

がらも、貧困や戦時中に親とはぐれたまま孤児とされている根本の原因を知らないのではないか。社会福祉分野の専門家はあまり国際化されておらず、知識や技術をもっていながら国際的に貢献する機会が少ない。おそらく、社会福祉分野ももっと国際化すべきだと思うし、国際協力に関わる人ももっと社会福祉分野に関する理解を深める必要があると感じた。

もう一つ任された仕事は、国際フォーラムの実施であった。マラウイ、英国、米国、スリランカ、韓国、日本のゲストスピーカーを東京とソウルに招き、代替養育を必要とする児童に関する国際フォーラムと施設訪問等を含めて一週間におよぶプログラムである。日韓事業を長年やってきた団体にとっては、実は初めての本格的な国際フォーラムであった。ここでは、まず助成金を得るための、事業計画書の作成から始まり、文献探し、翻訳等すべて一から始まった。フォーラムの内容は、全世界的な児童のおかれた状況、HIV/AIDS 孤児の状況、韓国の国際養子縁組の経験、内戦による児童の権利剥奪の状況などに渡った。対応については、まずは家庭崩壊を食い止めること、シングルマザーや親族の支援、親と分かれても家庭的な環境で子どもを育てる事の重要性、戦争で離散した家族が戻れるようにする必要性など、必要な支援の形は子どもの状況によって様々であるとともに、子ども中心の決定を強調した。また、このフォーラムに参加した素晴らしい専門家と密に連絡をとり、案内をし、直接話をする機会も多く、負担は大きかったが、とてもやりがいがある仕事を任せてもらえたと思う。

また、オフィスは2階がコミュニティカフェになっており、地域福祉活動をも行なっている。地元のNGOや市民団体が会合をしたり、イベントをしたり、地元の市民活動の場を提供している。近くの中学、高校生が気軽に立寄り、勉強したり、漫画を読んだり、安心してくつろげる空間も提供している。私も時々イベントに関わりながら、



韓国の職場の同僚と

韓国の市民社会活動の活発さを日々実感している。担当は違うが、企業との協働や資金調達のための活動も積極的に行なっており、活動の持続性という意味で学べるものは多い。開放的なオフィスは私にとってもとても居心地がいい。

まだ旅の途中

さて、読者のみなさんは私があちこちとずいぶん寄り道をしているように思われるかもしれない。私もまだ旅の途中なのである。それでも、自分としては、なかなか自分らしい道を歩んで来たかなと思っている。これからも国際協力分野でより専門性を深めて行きたいし、せつかく地域福祉や児童福祉に接しているのだから、この分野での経験を強みにしていきたい。日本人である事を大切にしつつ、グローバルな視点も養って行きたい。また、今は平和大学時代のクラスメートが世界中からソウルの自宅に遊びにきてくれるのも、楽しみの一つである。

最後に、私からのメッセージとしては興味をもったことがあれば、やらずに後悔しないように、まずは挑戦して自分らしい道を歩んで行って欲しいということだ。人によっては結婚、妊娠、出産、子育てなども待っていると思うと、キャリアの障害になると思う人もいるかもしれない、でも、私はそういった事も経験しながら現役で働く方も目にしてきた。(もちろん理解のあるパートナーの存在が欠かせないが。) 一見、回り道に見えるものも、大きな強みになるとプラスに考えて、長い目で見ていくことが重要だと思う。そして、自分の道を行く事を分かってくれる、周りの人達に感謝することを常に忘れないで欲しいと思う。(おわり)